

留学生の声

本場で日本語を学ぶ

教育地域科学部 異文化交流コース 日本語・日本文化研修留学生
トビアス・ヴァイス (Tobias WEISS)

私は主に日本語を勉強する目的で福井に来たので、「日本語H」という授業を受講した。テストを受けてから各級に振り分けられて、授業を取った。以前にドイツの大学で日本語を勉強していたものの、やはり「本場」で日本語を学ぶのは違うのだろうと興味を持っていた。授業のやり方も効果もそれぞれの先生によって違ってよいと私は思っているが、私がドイツで受けた日本語の授業はいずれも同じような形式だった。それは、学生が順番に、教科書に書いてある文法の問題を解いて読み上げるという形式だった。期末試験の範囲は、その暗記した問題だけだった。こうしたやり方はそれなりに効果はあるが、例文に前後関係がないから覚えにくいし、あまり楽しくないやり方である。

共通教育の日本語授業では、学生が新聞記事のある程度の時間をかけて読み、その内容について先生から与えられた質問に答えたり、難しい点についてグループで話し合ったりする。ある程度の知識を前提とすれば、この学び方は非常に効果的であると思う。記事を読んで新しい単語や文法表現を簡単に覚えるようになり、また、記事の内容を通して、日本の社会についての知識も増やすことが出来る。与えられる問題では、自由に口頭で説明する力が求められている。こうした方法では、ただ暗記した文章を話すだけでなく、本当の言語力が養われる。また、試験では口述試験の形式をとっている。口述試験では、授業で扱った記事の中のひとつについて、その内容をまとめ、自分の意見を言葉にすることが要求される。この点は、以前に私が受けた日本語の授業の試験とは異なっており、今でも試験で使った言葉はだいたい私の記憶に残っている感じがしている。

私にとって共通教育の日本語の授業は、モダンな授業を意味している。そのやり方を他の先生も見習って、授業をより効果的にそして楽しくしていただければいいと思う。